

太田英利主任研究員

与那国島は琉球列島の最西端に位置し、晴天時には台湾も見える文字通り「国境の島」です。わたしが初めて与那国島を訪れたのは1976年、高2の夏で、当時から生きもの好きであった私は動物に出合うたび、そのすべてに目を奪われました（スズメ以外はみな初めてでした）。当時から興味があった爬虫（はちゆう）類に加えて、森の傍



ひとはく 研究員 だより

らで目にした大きなミミズ
の死骸は特に印象に残りました。

大学で爬虫類の分類学的研究を志してからは、ほぼ毎年のように与那国島を訪れることになったのですが、しばらくその「大ミミズ」を目にすることはありませんでした。生きたミミズに遭遇したのは83年の夏で、地表をはっているのを見つけて撮影し、その写真を手がかりに文献を調べたものの名前も分からず、「まだ正式に名前もつけられていない、いわゆる未記載種なのかな」と漠然と思ったのを覚えています。そのうち大学院で課題とした爬虫類の研究で忙しくなり、そ

れ以上、この大ミミズを調べることはありませんでした。

再び与那国島の大ミミズに遭遇したのはさらに20年後で、与那国町が町の名物である巨大蛾（が）ヨナグニサン（方言名・アヤミハビル）を中心に島の生きものを紹介する目的で建設した自然史博物館「アヤミハビル館」でのことでした。当時、ミミズを専門に食べるヒメヘビ属の与那国島特産種ミヤラヒメヘビを調べていた私は、その関係でこの大ミミズの正体についても、以前にも増して興味

大ミミズ

時間、国境を超え研究進む

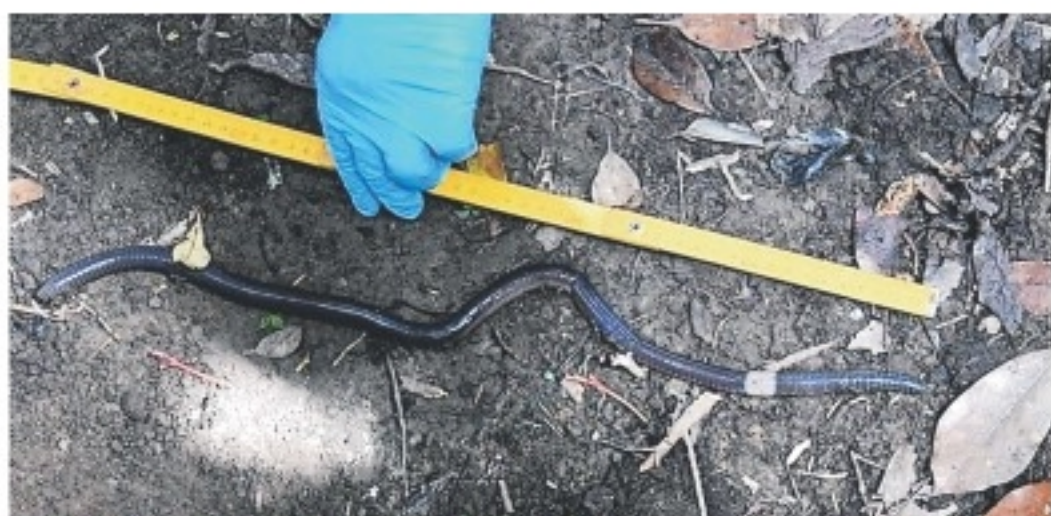
が膨らんでいました。それもあって、その標本を調べさせていたただきたいと願っていると、アヤミハビル館の方は快く承諾し、提供してくださいました。

ここからが問題でした。確かに私自身、随分とミミズの分類に関連する文献は調べたものの、やはりミミズの専門家ではないため分類上の判断に確信が持てません。特に問題だったのは、与那国島に隣接する台湾のミミズの情報がほぼ皆無な点でした。ところが、ここ

ズの専門家から、同様の関心を抱きつつ爬虫類を研究している私にコンタクトがあったのです。そこで早速、与那国島の大ミミズについて相談すると、台湾にも同じ仲間が多く生息している

ので詳しく比べようというさらには台湾の北部に住む最近縁種とは250万年〜500万年くらい前に分かれ、その後、独自に進化してきたこともDNAの解析から示されました。これは与那国島が台湾と海で隔てられた時期であると解釈できます。さらにこのミミズの存在が、過去に生息していたヒメヘビの仲間の大型化に影響した可能性についても、検討が始まりました。

高校時代の「与那国島の大ミミズ」との出合いは、地元のみならず、そしてさまざまな分野の研究者諸兄からのご助力のもとでさらなる展開へと進んでいきます。



ヨナグニオオフトミミズ
（栃木県立博物館 南谷幸雄氏提供）



ミミズを専門に食べる与那国島特産のミヤラヒメヘビ（関慎太郎氏提供）